

特 249

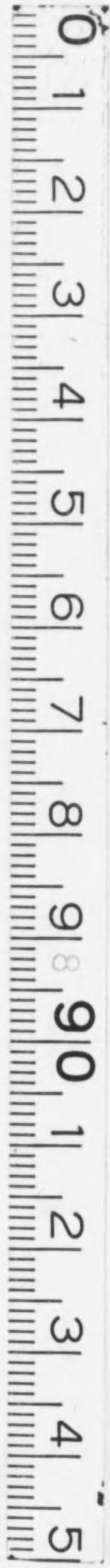
243

聖徳記念會叢書第四輯

伊藤痴遊謹話

明治天皇の御聖徳に就て

長野市聖徳記念會



始



特 249
243



前書

毎年九月九日長野市に於ける 明治天皇御巡幸記念日には、市民相集まつてその記念の
式典を行ひ、又記念講演を催すを例として來た。昭和十三年の記念日には、故伊藤痴遊氏を
聘して講演會を開催した。伊藤氏は當日病痾重かりしも前日からの約束でもあり、又事
明治天皇の御聖徳に關する御事でもあるからとて押して來長された。本冊子は當日の謹講
を速記に取つたものである。

昭和十四年八月

長野市明治天皇聖徳記念會長

高野忠衛





明治天皇の御聖徳に就て

伊藤痴遊謹話

前以て御断り致しますことは、此五月に上海へ参りまして、歸つて來てから面倒な病氣に罹りまして、爾來四拾日許り、殆んど絶食に近い日を送りました。

昨今恢復に向つては居りますが、疲勞の爲長い講演に耐へ得るや否や、自分自身としては頑張る心算りであります。

私は三千人の人を前にして御話した經驗も持つて居りますが、右様の次第で私としては今日は自信を以て立つて居らないのであります。

此點豫め御含みを願つて講演に這入りたいと思ひます。

殊に講演の題目が、明治天皇の御聖徳に關する事項でございますので、謹で御話を致したいと思ひます。

明治天皇の御聖徳に就て申上げますに就ては、嫌でも明治維新史の半ばを御話申さなければならぬのであります。

二

明治維新の皇謨は、天皇の御心、御力の這入らないものは一つもないのであります。従つて御話は、維新史に遡つて申上げなければならぬと考へて居ります。

此事は吾れ人共に、日本の國民は輕々しく想つてはならない、粗末にはならないことでありませぬ。

畏れ多くも維新史と、天皇の御聖徳の御事を考へると云ふことは、普通一般には多少の隙と云ふものが御互にあるものですが、一分の隙もなく、どうしても結び着いて離れない、どうしても結び着けて御話を申さなくてはならないのであります。

殊に天皇の御生誕の時を考へると、日本が國歩艱難な時代でありまして、孝明天皇の御代の國歩艱難と云ふものは、一通りではなかつたのであります。

此間に御生誕遊ばされたのですから、皇室の御造營も極めて微々たるもので、皇室の御財政も窮迫せられた時であり、御不自由なことも多々あらせられたことであります。

然も天皇には、非常に英邁に渡らせられたのであります。

是を極端に申したなら

「艱難汝を玉にす」

と云ふ、玉を作るとも申されると思ひます。

此御苦心の御育ちと云ふことが、人情を知得し、さうして上下に結び付いて居ると云ふこととなるのであります。

そうして御苦心の間に得られた精神と教育と云ふことが、天皇の御聖徳を完成したのであります、斯う云ふ風に考へて行かなければならぬと思ひます。

殊に父御門を失はれた頃は未だ御幼少の時であらせられました、一般人と同じく實際に父を失つた程、全く是程の不幸はありません。

國は當時國歩艱難の最中であり、帝國の攘夷は未だ成らないと云ふ場合に於て、父御門を失はれたのでありますから、吾々が今日から拜察致すも誠に畏き極みであります。

其處で、此時代を概括して見て行く必要があると思ふのです。

殊に孝明天皇の御代と致しましては、文久から慶應に掛けて、宮廷の廻りには何時も血が流れ、道には劍戟の光が右と左にきらめき、殺伐たる空氣が漲つて居た、そして夜分など道を通る

三

者はなかつた位です。

斯う云ふ状態でありました。

殊に文久年間に於て、前後二度の政變がありました。

それは恐るべき兵亂が、宮闕の間に起つて、京都の三分の二を失はれたと云ふ、さう云ふやうな氣が漲つて居り、如何に當時の世の中は六ヶしい世の中であつたか、想像するに餘りあるのであります。

二度の政變とはどう云ふことであるかと云ふに、第一が文久二年に宮中革清の大運動が起つたことである。

宮中革清の大運動と云ふのは、岩倉卿を初めとした所の、公卿の一派を、宮中から退けると云ふことでもあります。

只斯う云つたばかりでは判らないが、是程面倒な問題は又とない位で、歴史を繕いても岩倉を排斥するなど云ふことはありません、其第一は攘夷問題の取扱方、第二が和宮様御降嫁の問題である。

攘夷問題は朝廷の御趣旨に一致徹底することで、攘夷の根本に於て違ふ所のない政を一度に徹

底させることである。

是は餘程六ヶしい譯で、色々工作の運動をした譯である。

和宮様御降嫁は此工作中的の一つである。

此方は孝明天皇の御妹君に當らせられ、明治天皇の只御御一人の叔母宮様であります。

此御方に幕府側の徳川家茂と御縁組を御願ひする、是は攘夷根本の皇室と徳川との御縁組と云ふことから來た運動で、是を考へた者が多かつたのであります。

此實際問題としては安藤對馬守を京都に遣し、久世大和守と一年も二年も掛つて可成り運動したのであるが、是を直裁簡明に裁いたのが岩倉であつた。

岩倉と云ふ人は元來議論の多い人で、此人と議論してはどうしても勝てない、果ては皆相手にしなくなつてしまつた位で、其議論も堂々たるものであつた。

斯う云ふ時には斯う云ふ人が必要であるもので、岩倉を躍らせて利用しやうと考へた、只岩倉は生れながら家柄が極めて低いので岩倉家へ養子に來た人で、實家は高倉と云ふのである。

養家が岩倉であつたのである。

それとて知行百五十石で、百五十石とは一日分でなくて、一年分の知行が百五十石ですから生

活の状態も思ひ遣られるのである。

従つて禁庭の上りは、自分の志を遂げるには極めて遅かつた人で、侍従職になつたのは三拾歳を越へる頃であつた、至つて家格の低い人で、今の西園寺公は八歳にして侍従になつたのである、幕府令で人の歳は數へ年を以て決めて居るので數へ年八歳で滿六歳と云ふ譯である。

事實六歳、數へ年八歳の西園寺公は小僧つ子で格式は良いが、公卿の内第二位に着き、岩倉は色々と運動して三拾歳にして畫策して、侍従職になつたのが三拾一歳である、其代り西園寺公は數へ年八歳で、なつた時は使ひ途はない、如何に天稟發明であつても駄目である、一方の岩倉は其處へ行くと融通が利いて頭が良い、所が非常に敵が多い人で岩倉を皆嫌つて居る。

又至つて出娵張り屋で表通りの公卿を睥睨して居ると云ふ人であつた。

此の人が和宮様御降嫁のことを扱つたのである、然し第一に困つたことは御降嫁の御本人が嫌と仰しやれば、仕様がな。

殊に江戸には異人が出入るので嫌だと仰しやる、それには岩倉もほと／＼困つた。

幾度か考へたのである、亦其當時有栖川若宮と御婚約のことが判つたので、それを徳川へ御降嫁になれば二重結婚と云ふやうなことにもなると云ふので苦心したのである。

朝廷が幾ら頑張つても、攘夷せんとするには兵力を持たずには攘夷は出來ない。

知行、勞力が缺乏して居ては駄目だ、是には關東の武將に委託する外には途がない、又宮廷の御用度の窮乏を救ふ上に於ても、徳川に何かと要求する上にも、御降嫁になつて居る方が宜しいと思ふ。

天子様の御膳部にあらせらる鯛は臭くない鯛はない、京都山口から獲るのであるが却々手に入らない、恐らく何時も御膳部の鯛は臭いものではあるまいか。

或日のこと岩倉は、西海利兼に、御下げになつた御膳部の鯛を出した所が西海は食べない、其處で岩倉は

「朝廷の御肴は皆こうである、此様子を見て貴公はどう考へるか」

朝廷の御用度を徳川より幾分増して貰はねばならん、事實窮乏を救ふ上に於ても、徳川に御降嫁申上げるが良い、それには有栖川若宮と御婚約があるので、此方を何んとか話を付けなければならん、それで岩倉は當の熾仁親王に御目に掛つて、さう云ふことを申上げた。

「和宮様御降嫁は朝廷の御爲、御承認をお與へ下されたい」と御承認を願つたのである。

所が高貴の方に失禮な御断りは出来ない、然しさう云ふ御取扱ひになることが御上の爲になることか、と仰言つて御許しになつたのである。

斯うなると御婚約破談は形式からすると、有栖川宮の方から御断り申上げられたことになつた。實に其才能と云ひ甚だ考へたもので、和宮様の御降嫁に依り結婚儀式一切は徳川持ち、關東からの送り迎へも、京都市民に御別れの餞別も徳川持ち、又公卿にも御土産が出たが何れも徳川持ちである。

其上御用度の料が最高、攘夷は必らず決行することを誓つた。

是で攘夷派が力を延して來た。

是が文久二年のことである。

文久三年長州の勢力驅逐、是は若し長州が喰ひ込んで來れば六かしくなるからであつた。

此時の中川宮様は只今の皇后様の御里方久通宮の先々代に當られるお方で、是は文久三年のことである。

斯うした目まぐるしい間に、明治天皇が御育ちに成られました。質實剛健の御氣持ちを養はれた譯である。

是が後に色々な面倒な事變に遭遇しても、御心は微動だもせず、事件の結論を見極められたその御性格を養はれたことになるのである。私は斯う云ふことを申上げたいのである。

あの窮乏なる中に育ぐまれたのが、偉大なる御人格を御築き遊ばされた譯で、此中に奉仕し御指導役を勤めたのが中山大納言と云ふ人で、貧しいこと此上もない中で良く御補導申上げたもので、田中河内之助が御養育掛り、西園寺公望が御相手を申上げた、是が文久三年京都の状態である。

然し斯う云ふ中でも人物漢の岩倉をどうしても見離すことは出来ないのである。

岩倉は自分の身の置き所もなく家僕と岩倉山に蛰居して居た時には、良くあんな生活をして居たものだと思ふ程である。

どうかすると二日間も食事をしないこともある、自分が其處へ見に行つた時には、今は岩倉村で修繕して立派になつて居たが、こんな家に寝起き出来るかと思つた位です。

戸障子が二、三枚立つて居る、屋根があるだけで、どうしても人間が住んで居たとは思はれない成程。是では豚小屋である、只二間しかない崩れ掛つた家の中に住んで居て食事も碌々攝らない。こんな家を持つて借す家主も良くあつたもので、色々と此家主の植木屋が自分のものを割いてやつたものである。

それを見込んで下郎志願に來た變り者があつた。

「是非拙者を抱へられたい」

と申込んで來たので吃驚した岩倉は

「こんな荒屋で、食事も碌々攝らんで居る有様であるから、貴公に月給も食事も與へることが出來ぬ」

と言ふと、件の男は

「いやそれが尙更結構で、月給は何もいらん、是非使つて下さい、師が食はれなければ拙者が働いて食事を食べさせる」

是が岩倉を見込んで訪れた小林彦次郎であつた。自分で働いて食はせるから使つて呉れと云ふ……斯う云ふ下郎なら何人來ても差支へない譯である。

此小林はどう云ふ人物であるかと云ふに中岡慎太郎、坂本龍馬と同じ熱血漢で仕事は坂本以上にやつた人である。

一個の國士で、薩長聯合に中岡の考へで土州を加へて薩長土三派聯合を以て京都を鎮めたのであつたが、長州藩の攘夷論が擡頭し勢力を得て來たので、是を早く決めやうと三條實美を江戸へ御

遣しになり、文久三年徳川家茂は京都に上つて勅を拜し、攘夷即行の布告をなしたのである。

此時長州藩は下關海峡で外國の船を砲撃したのと、薩摩藩が英吉利軍艦と鹿兒島の沖で砲火を交へたので、愈々攘夷が早められた譯である。

斯う見て來ても小林、中岡などは坂本より以上の仕事をやつてのけた志士であつたのである。後に私は田中光顯に會つた時

「誰れにも話さない、亦世に出て居ないが御前には話して置かう」

と言はれて話して呉れたのであるが、國と云ふものは何れの國を問はず一度は敗戦の憂目を見ることが良い、一度も敗戦を知らない、勝つた勝つたで居ることは國民の魂が弛緩するからいけぬ、長州が強いと言つても薩長軍が外艦と砲火を交へ薩摩が英吉利に敗けたからである。

是は良い例である。

岩倉が中岡、坂本と接し、色々談合の末一遍で意氣投合してしまつた、其時中岡が「なぜ薩摩と提携しなんで居るか、三藩聯合で宮中を自由に動かさう」と薩摩に使ひを派遣して西郷吉之助と提携した爲めに、一遍に空氣が變つて來たのである。

斯うした三者の主義主張が會薩連衡の時世と云ふものになつて來た。

此間の時世と云ふものは小説に等しい最も興味あるものである。

三

小説家が書くよりも尙面白い事實があるのである。

是は岩倉が岩倉山に蟄居した内になした仕事で、是を天皇に執奏したのである。

其名前は「叢中蟲泣」としてあり、其取扱方を太政關白千草有文に託したが、岩倉の位置がどんな身であるか判らんで取扱ひやうがなく困つたが、手続きした所御收めになり天皇の御目に入つたのである。

さう云ふやうに岩倉の力が非常に大きなものがあつたのである。

當の岩倉は待命中、文字が讀めなく困つた、自分が窮乏して居るのだから人を雇入れて教はることも出来ないし、所謂當時の人であつても自分で讀み書き出来なければいかんと大の仲良しの坂本村の茂國寺の住職に、

「どうです、相談相手になつて呉れる人はないかな」

と話した所、茂國寺の住職は

「古今の典例殆んど盡さざるなし、文章多彩、第一佛典に通ずる」

といはれる麗海上人を推薦した、麗海上人は山本君廣の伴で、宗門の意見に反對した爲宗門を追

はれ、今私の離家に居る、是に一つ頼まうと云ふことになつた。此山本と云ふ人が岩倉を侍從にさせたことにもなるのである。

此時の玉松操と云ふ人の述べたのを私が全部記憶して居りますが、明治天皇が睦仁親王から慶應三年正月御踐祚あらせられて以來十月に太政が奉還され、同年の十二月に王政復古の大令を御下しになつてから、年號を明治と改め、一世一元の制度を御定めなされたのであるが、此制度を御定めになるにも外國には紀元の年號があるのに、日本の國にはなぜ紀元の年號は今迄にないのか、其處で色々論議したのであるが、玉松は

それはもうちやんと決つて居るではないか、神武の御創業から諸事萬端一切これに基いて諸事を進めて來たのであるから、此時に遡つて皇紀を定めるのが當り前である、神武の創業に依つて日本は國の基が定まつて居る、議論の餘地はない。

と言つて結局天皇の御裁可に依り、玉松の言に依つて紀元の成立を見たので、村田新八に命じて其手続き一切を委せ、茲に我が國の紀元が制定せられ年號を明治と改められたのである。

此玉松は後に京都から歸つて死んだが、此死を痛く御惜しみなり、正三位を御贈位になつたことも考へなければならぬと思ふ。

斯う云ふやうな時代から天皇は側近者の發言を始終じつと御聞きなされて居られ、彼の明治の御代を御作り遊ばされた譯になるのである。

それから更に御逸話であるが、人の氣を外らさないと云ふ、明治天皇の御逸話は有名なものであり、一方尊嚴を御増進遊ばされたことが多々あるのである。

それに就て伊東已代治が自分に語られたのに、全体御前會議には前後の事情を良く御認識あらせられる、何分明治天皇は臣下等が意見を述べて居る間は決して一言も發せられず、頭を下げられ、腕を組んでちつと臣下の意見を聞召されて居るが、少しでも議論が脱線して來ると頭を上げられ、ちつと議論の主を睨むやうに見てお出でになる。

それ御覽になつたぞ、とぶるつとするやうに身震ひして議論を止める。

伊東は何時も議論の多い人であるから何時もぶる／＼して居る譯であるが、つひに伊東はいつそのこと王座を拜さないでやるといふことにした。

是で伊東はぶる／＼が抜けたと言つた、そして發言中でも俯向いて玉座を見ない、それでも伊東は氣が引けて議論を止めてしまふことがあつた。

斯う云ふ點から見ても平常の御尊嚴と言ひ、御睨みの利く點では實に堂々たる譯であります。

其尊嚴と、ちつと顔を上げられる時の御眼の光の物凄さ、御威嚴の強味は實に恐しい位であつたと言ふことです。

そればかりでなく、臣下を相手に色々御冗談を仰つた、其御冗談が一寸徹底したものであります。

そして色々批評して綽名を付けることが御上手なのであります。

西郷從道と云ふ人は酔ふと活潑になり、人を超越した人で賑かになり、晝一人で居ると全然居ないやうに静かで判らない、酔ふと十人前位賑かである。

或る時西郷に

「御前は晝の中は居るか居らないかも判らない様に静かだが、酔ふと大分賑かになるやうぢやが、是から「蝙蝠從道」と名前を付けたらどうかな」

と、すつかり西郷從道を蝙蝠從道と云ふことになされたさうである。

又板垣退助がお伴の獵に出掛けた時、馬は大坪流で自慢する程却々の名人であるが、其時馬から落ちたが不思議に怪我がなかつた。

其日御前に出ると

「御前は今日馬から落ちても怪我がなかつたが、どう云ふ流儀かそれも大坪流か」と御訊ねになり、それ以來宮中では大坪流と云ふ異名を取つた程である。

明治五年に宮中で無禮講の夜會が催された時、臣下一同御前に列んで御酒を頂戴したが、其中に蜂須賀侯爵は盃を何かしら懐へ入れる癖があつたので、其夜も天皇から金盃が一通り御廻しになり、又陛下の御手許へ戻る譯だが、蜂須賀の手許へ來ると其金盃をすつと懐へ入れてしまつた。是を見て居られた陛下は

「蜂須賀が御家流を出したぞ」

と仰せられ、蜂須賀侯は一代の失策をやつてしまつたと後悔して居た程である。

それから又中川英舟と云ふ人は、宮中御苑の御用を承つて常に出入して居たものであるが、此中川がとても葉巻の煙草が好きで、宮中の接待で出される葉巻を常に吸つて居たのであるが、或る日誰れも居らないものと、出された葉巻一箱を其儘懐へ入れて持つて歸つて、知らん顔して居ると、

翌日前振れもなく勅使が参つて、

「御上では是を下されたから有難く拜領せよ」

と言つて歸つてしまつた。

勅使が歸つてから包を開いて見ると、葉巻の箱が五個あつたので

「是はしまつた、判つたか」

と恐縮し、直ちに御詫びに参向すると

「欲しければ幾らもやる、山のやうにあるから、黙つて持つて行くことはいかんぞ」とお諭しになつたと云ふ、斯う云ふ御逸話は未だ澤山あります。

明治天皇御聖徳のことを申し上げたいと思ひます、群臣の融和と云ふことは、極めて言ひ易くして是は行ひ難いものであります。

人間が道徳を行ふことと同じで六ヶしいものであります。

是を長い御在世中に、完全に爲し遂げられたのが明治天皇であります。

天皇としてではなく、一人間としても典型的な御方であり、一個の御英雄、世界有数の御英傑であらせられたと、私共斯やうに考へて居ります。

先年ヘーグの平和會議に於て、平和會堂に偶然にも各國主權者の寫眞が掛つて居りましたが、

私は、それを見やうともなく一寸眼を上げた所、此平和會堂の表面一番上の所に明治天皇の御寫眞が掛つて居りました。

其兩側に明治天皇の御寫眞より小さい各國帝王、大統領の寫眞があつたのである。

此時は心にもなく、考へもなく拜したので、何んとなく目頭の熱くなるのを覺へた程であります。

案内したのは時の西田オランダ公使であつて

「伊藤君、籤引で當つて一番上位になつたのですよ」

と言はれましたが、偶然にも上位とは是も聖徳の然らしむる所と考へました。

此通り如何にも世界的に、明治天皇の御偉徳と云ふものは大したものであつたのである。

亦臣下を慈み給ふと云ふこと、中山二位局に御孝養を御盡し遊ばされたと云ふこと、又恩師に對する尊敬をなさつたと云ふ點に於て、今日に於てこんな御方はない。

今日では教育家の誰方も御存じであります、明治十一年の副島種臣に賜つた勅書があります。

副島が宮中に奉仕して居つたが、自己の職を完うしたから御免を蒙らうとしたのに對して、明

治天皇は是を聞召され副島に勅書を下さされたのである。

是を拜讀して見ても聖意がはつきり窺へるのである。

卿は復古の功臣なるを以て、朕今に至て猶其功を忘れず、故に卿を侍講の職に登庸し、以て朕の徳義を磨くことあらんとす。

然るに卿か道を講ずる日猶淺くして朕未だ其教を學ふこと能はず、此日來卿病瘳に在て久く講を缺く、仄に聞く卿侍講の職を辭し、去て山林に入らんとすと、朕之を聞て愕然に堪へず、卿何を以て此に至るや、朕道を聞き學を勉む豈一二年に止まらんや、將に畢生の力を竭さんとす。

卿亦宜く朕を誨へて倦むこと勿るへし、職を辭し山に入るか如きは朕肯て許さざる所なり、更に望む時々講說朕を賛けて晩成を遂けしめよ。

一天萬上の君に於て當時御進講の臣下に對しての御宸翰を下し賜ふ、是を拜讀して實に其御人と成りを窺ひ得られるのである。

此勅書は夜の十一時頃になつて土方久元に

「是を携へ副島の屋敷へ參り本人に手渡せよ」

との御仰に何事か、土方自身も判らないのであつた。

其夜は折柄の暴風雨で通行の人は一人もない人の氣もない道路を馬を走らせ、越前通りの副島の屋敷へ十二時近くに参つた。

「勅使だー勅使だー」

と云ふ聲に、副島が出て奥へ案内すると、帛紗包を出し

「是を手渡せよ、との仰せである」

副島は是を拜受して、半ば讀まない内に涙が出て来てどうしても讀むことが出来なかつた。

「今晚は深更でありますから、明早朝参内致します」

とて、翌日参内したが、何事も御言葉はなくそのまゝ復命した程である。教へる人も教へられる人も兎角不満はあるものであるが、其不満の蔭にも必らず恩師の教へを忘れてはいかん。

此氣持は曲げることの出来ない尊いものであつて、又人が左右されない麗しい心根である。

例へ僅かでも教へた、教へられたと云ふものは、教へられた者に對する慈みは忘れてはれらぬことである。

それから明治八年頃には斯う云ふこともあつた。

それは木戸参議と大久保利通が議論して、木戸は席を敷つて京都に出て、大阪の宿屋に着き正に座に付かんとする所へ東久世侍従長が使ひに来て

「只今到着、御上の御沙汰を拜して……」

と、ちゃんと封をした御親書である。

其内容は

前日来朕屢々汝に歸京を命ず、汝病の不癒を以て懇々之を辭し、夙に其職を解かんことを請ふと雖も、今や國家の要務親く汝に諮問せんと欲するもの多し、朕切に汝の疾を力めて歸京せんことを望む、乃ち特に東久世侍従長を遣し朕か旨を諭さしむ 汝其れ之を休せよ。

是を拜受した木戸は大久保との議論から、感情の行き違ひで職を辭せんと、病氣と稱して大阪に下つたが、そんな問題はどうでも良い、と命の限り奉仕せんと臍を固めた。

斯う云ふことも矢張り君主として臣下に力を注がせられ、萬民のため御心を致され居ることと洵に畏れ多いこととございます。

明治三十三年に斯う云ふことがありました。臺灣總督兒玉源太郎將軍は、丁度彼の時は一般に云ふ義和團事件のあつた騒々しい中に、臺灣總督を勤めて居つたのである、此どさくさに紛れて

向ふ岸の福建省を取つてしまおうと色々策を擬らして居ると、厦門に暴動が起つたので西本願寺の坊さんを引上げさせ出兵せんと、三橋將軍を指揮官に運送船に便乗出發しやうとする所へ、當時の陸軍大臣桂太郎が元老の意向は皆反對であるので、思ひ止まるやう勸告したが、兒玉は頑として聞かない、辭表を出して何んとしても聞かないのである。

事報聞に達した後藤新平に御質しになるべく、直接御召し出しになつた。

「兒玉は何うして職を辭めたか、御前は兒玉の昨今のことを良く事情を知つて居るだらう」
との御言葉であつた。

即日臺灣へ侍従を御遣しになり、米田侍従が是を兒玉に手渡した

朕今卿か健康を缺き閑地に就て病を養はんと欲するの奏に接せり、惟ふに臺灣の事業多く卿か經營に頼り漸次其緒に就かんとす、朕は卿か任地に於て病を力めて事を見ることを望む臺灣は汝の力に依るぞ、との御言葉で、斯う云ふ所にも其御聖徳が現はれて居るものと思ひます。

明治二年のことであるが、當時田中光顯は宮中に勤めて居つた宮内大臣で、あつたが、突然御召しに相成り

「會津藩は今どうして衣食して居るか」

との御言葉に田中光顯は良くも御氣付になると恐懼して申上げると

「救済の手を延ばして遣はせ」

此會津藩は朝敵の扱ひを受けて居つたが、朝敵でも天子の赤子の一人である。

私は田中伯から

此話は誰れも知らない、今迄に發表されて居ないことだが、御前だけに話して置かうと云はれたのである。

それは世界に君臨する日本天皇の聖徳であると思ふ、

「君子の徳日月の如し」

世の中で悪人であつても、特別待遇されて居る人でも、太陽の光は平等に照して呉れる、此廣い世の中に太陽の恵は眞實に平等に照す、

「天子の徳日月の如し」

昔はどうあつても、今は何れも自分の赤子である、と救済の御手を差し延べられたのである、歴史は其時々書き改められることがあるが、天皇の御目から御覽遊ばされば國民は皆赤子

である。

是を考へ天皇の御聖徳を讃へなければならぬ。

日清戦争當時、鐘崎三郎と云ふ人は、私は一面識もないが、彼は長らく支那に暮し支那の軍事探偵などをして歸つて來たことが叢間に達し、服装も其儘支那服を着て御目通りを仰付つたこともあり、無位無冠の者に對しても斯やうに御心を寄せられることは世界に其例を見ない、洵に御慈みの程長れ多い次第であります。

殊に政治的の上からは伊藤博文が政黨内閣を必らず必要であると願つて發案し、明治三十一年六月二十三日に板垣、大隈の聯立内閣を作つた。

作ると共に伊藤は自由人として政黨に盡したいと云ふ念願から、皇室から戴いた爵位、勳章は一切御返上申上げたいと云ふことを伺つた所

「御前は職務の爲若し過失があれば困ると云ふが、それは過去の功勞に依つてやつたので、是から先に過失があつても何んの障りもないではないか」

と仰せられ、猶其時御下賜金として拾萬圓を政友會の組織の費用として御下賜になり、政友會成立の發端となつたのである。

政友會の成立には天皇の御手許金御下賜の事實があるのを、今日では何んのかんのと政黨無用論を唱へるものがある。

それは餘りにも眞の事實を知らないからで、天皇の御手許金に依つて政黨成立の因をなしたとは、恐らく今の代議士でも知らん人が多いことであらう。

矢鱈に無用論や解消論を持出すことは、考へただけでも畏れ多い極みである。

亦天皇の政務に御精勵のことを申上げるに、是は伊藤伯が私に特別話されたことを考へて見てもはつきり判るのである。

それは憲法の成章は井上が書いたが、裏には元田永孚が付いて居り、調査や文章は此二人でやつたのである。

議院法と選舉法は金子が書いたのであるが、此三件は何の個所にも天皇の御言葉の加つて居ないものはない、或は御説明とか御意見が必らず加つて居る。

選舉の方法に於ては世の移り代ると共に、新しく付け加へなければならぬが、基礎だけは變更してはならぬ、補足はしても「天皇の御言葉が入つて居るぞ」と云ふことを考へてやらねばいかん。

是だけは君に話して置く、斯う云ふことでありました。

三六

平常何事にも御苦心遊ばされて居られた御方でありますから、天壽を早められたことと思ひ、あの御苦心がなかつたら天壽も今少し長く御保ち遊ばされたことと恐察し奉る次第であります。日清の戦争の折大本營を廣島に御進め遊ばされ、其御歸りになる時土方久元が俄かの發熱に供奉は兩三日遅らせねばならぬ、重病のこともないが、俄かに熱氣が高いので醫者に診て貰つた。幾日も御歸還を延ばす譯にも行かぬので其旨申上げると

「醫者を遣はせ」

との御言葉に、醫者に診て貰つた所、兩三日安靜にして居れば良いとのことでございますと申上げた所

「それではそれ迄出發を延ばす」

それでは準備も既に出て来て、今更日延べすることは出来ませぬ、三日も延すことは費用は申すまでもなく、準備が總て狂つてしまふことを申上げると

「久元は東京から一緒に伴れて来たのだから、引揚げる時彼一人を残して行くに忍びんではないか」

と、御歸還を御延期遊ばされたのである。

其後或る所の講演で私は土方與志が、或る運動に携つて居たが、父土方久元此御言葉を賜つた事實を述べた所、講演を中止されたことがあります。

此與志は大それたことをして生活に困り露西亞へ行つて居るが、母親は心配して向ふへ迎へに行つたなど云はれて居るが、斯う云ふことなんぞはあり得べきことでもなければ、又そんなことは出来るものではないと思ひます。

明治二十二年九月十一日のこと、學習院長の三浦梧樓將軍の所へ杉浦重剛先生がふいにやつて来た。

もう燈が點いて居た。

何んの案内もなく来た。

「少し相談があつて来たが」

「なんだ！」

「大隈の條約改正に付いて、金融無缺の國に外人の裁判官を採用するは國体を傷付けるもので、大隈の發案は國家の一大事だ他の仕事には必要もあらうが、此ことだけは今日内外の情勢から

日本は早く是を撤回せねばならん、外人の裁判官を辭めさせなければならん、俺が井上に幾ら言つても聞いて呉れん、頑迷で聞いて呉れん、色々考へた末來たのだ、御前の力を借りる外はない、日本のためやつて呉れ」

「俺は學習院長だから、政治の實際運動に付いて活動する資格はない」

「學習院長として俺が頼むのだ、良く考へて呉れ」

と言葉を盡しての話に杉浦は聲を秘めて、御上にじき／＼申上げることが出来ないか。

三浦は色々考へた末

「仕方がない國のためだ」

翌日の朝、日本の學校制度に付いて恐れ多いことながら申上げる、と返事をした。

「それではやつて呉れるか、頼む」

と言つて杉浦は歸つてしまつた。

翌日の朝早く自宅を出て行かうとする所へ、古島一雄と云ふ男が來た、杉浦の書生である杉浦は一雄と云ふ名前を

「一カス」としか呼ばない、名前を二分の一しか呼ばないで何時も「一」「一」と呼んで居たので

ある。

「先生が送つてやれと仰ひましたから」

「俺は卑怯な人間ではない」

とから／＼笑ひながら出掛けて行つた。

教育の方針變更に付いて、學校の御話を申上げることがは學習院長の特權で、直接御目にかゝることが出来る。

皇室の御内意を承ると宮中で拜謁を仰付けられた。

所が御上を拜することに慣れて居る三浦でも今日は言葉が出ない。

偽りをつつんで來たからである。

教育の方針だと申上げて其裏に條約改正を隠して居るからである。

陛下は實に名君でありますから、ちゃんと外交問題で參つたことを御存知で、御氣色は良くなかつた。

「宮中で偽りは許さんからな」

三浦は此御一言ほど凄かつたことは、なかつたと言ふて居た程である。

「何事ぢや」

懷中から白紙の封書を取り出し

「畏れ多いことではありますが、茲に色々認めてございます、御覽願ひます、言葉には往々間違ひがありますから、何事も認めてございます」

それは大隈の條約改正、主として外國人の國籍ある者を緩和して戴きたい。

他の問題は議論の餘地はございますが、此一事だけは議論の餘地はございませんといふことを認めてあるのである。

「書面は精讀し置く」

承知、不承知は其場で仰るものではない、承知、不承知は決して仰しやらない。

三浦は其御様子を拜して、偽りを申上げ御立腹遊ばされて居ることであると、屋敷へ歸つて來てから玄關の門を固く締めて、家人でも出入を禁じ

「絶対に外出は相成らん」

と三浦は眞劍だ。

一室を淨め服裝を正して日の暮れるのを待った、三浦は腹を斬る心算りであつた。

燈りの點く時分、表の玄關をこと／＼音をさせ、開けて入つて來る人がある。

元田永孚である。

天皇の側近に奉仕して約二十年、大概の詔勅は此人の手になると云ふ一大碩學である。三浦が玄關にのそ／＼出て來る所を見て

「おー三浦か、泣いて居るな、貴様えらいことをする奴だ！」

「判つたか」

「自分を御上が御前に御召しになつて、三浦が斯う云ふものを置いて歸つた、良く云ふて置け」と御渡しになつた。

「貴様の本懐は達せられることになつたぞ、俺は餘りにも嬉しくて貴様に報らせるために來たんだ、良く御承知だ、心配するな」

と言つて元田は歸つて行つた。

送り出してしまふと、家人を皆んな寝かしてしまふ、何時も早く寝たことがないから却々寝られない、すると三浦は

「早く寝ないか」

と嗚鳴りに来る、又一時間位経つと

「早く寝てしまへ、何をして居る」

是では寝やうとしても却つて眠むられない、の家人寢静まるのを待つて三浦は服装を改めて、昔の式に則つて九寸五分を前に置き、夜の十二時半頃皇居に向つて、三度拜禮をして、懸て掛らうとした。

どん／＼門を叩く者がある。

「宮中からの御使ひだ、御使ひだ」

こんなに遅くはてなと思つた。

「御使ひだ、御使ひだ」

土方久元が見へた、嫌應なしに門を開けて入つて來た。

三浦は、しまつた、遅れた、遅れた、と言つた。

「腹を斬ることは不敬だぞ」

それから別室に出て勅命を聞いた

「本日参内の砌り條約改正問題のことに付いて伏奏したる件聞き届け置くとの御言葉である。」

然し如何なる話にでも人は偽りを云ふべきではないぞ、と、今日限り此點は許して遣はすとのことだ」

是には三浦も言葉が出ず、勅命を拜して只泣いて居る。

「未だ何か言ふことがあるか、俺も途中で泣きながら來たんだ、御言葉を拜して御前を退がらうとすると、是からは間違ひないやうに、と御諭しになつたぞ」

良く御叱りもなくその上有難い御言葉まで下し賜はつたとは、三浦は身命を堵しても決して偽りは申上げぬと、只有難くて、泣けて仕方がなかつた。

終ひには二人互に抱合つて泣き乍ら御上への一生の御奉公を誓つた程である。

是が有名な

「三浦梧樓伏奏事件」の梗概である。

斯う云ふことは歴史にも餘り例が少いことであらう。

斯う云ふ所に明治天皇の御英明なる御聖徳の現はれがあつたのであります。

さればこそ、御大葬當夜乃木將軍は死を選んだのだ。

將軍の死は殉死として取扱はれた。

390
519

聯隊旗を失つた過失に對しての御詫びである。

特に天子の赤子を戦場で多數亡くし、愛兒二人迄失つた、今は御供する外に途はないと御跡を慕ひ夫人と共に死んだ。

是を單純なる殉死と同じに取扱ふことは宜しくない、厚い責任感から來た尊い死であります。是を以て終講と致します。

昭和十四年八月十五日印刷 (非賣品)
昭和十四年八月二十日發行

長野市役所内

編纂並 發行者 長野市聖徳記念會

代表者 高野 忠 衛

印刷者 長野市妻科一七三 大日方利雄

(刷印社聞新日每濃信)

終

